

Title	マルクス、エンゲルスにおけるNationとNationalitat : 四八年革命における「歴史なき民」の理論的背景について
Sub Title	"Nation" und "Nationalitat" bei Marx und Engels : Uber die theoretischen voraussetzungen der "geschichtslosen" Volker in der Revolution von 1848
Author	勝又, 章夫(Katsumata, Akio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1998
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.67, No.3/4 (1998. 7) ,p.129(489)- 153(513)
JaLC DOI	
Abstract	Wie allgemein bekannt, bezeichneten Marx und Engels die nationale Minderheiten Osteuropas als "geschichtslosen Volker" und sprachen ihnen kein Selbstbestimmungs recht zu. Aber die theoretischen Voraussetzungen ihrer Stellungnahme zu den osteuropaischen Volkern sind noch nicht geklart. Die notorische Charakterisierung der "geschichtslosen Volker", die oft Engels' emotionaler Ausserung nach der Niederlage der Revolution zugeschrieben wird, hangt jedoch mit Begriffen von Nation und Nationalitat eng zusammen, die Marx und Engels bereits in ihrer materialistischen Geschichtsauffassung gebildet hatten. In der materialistischen Geschichtsauffassung, die Marx und Engels in ihren Schriften von der Deutschen Ideologic bis zum Kommunistischen Manifest entwickelten, bestimmten sie die Begriffe von Nation und Nationalitat doppelsinnig. Sie verstanden einerseits unter der Nation ein Volk, das einen modernen Nationalstaat gebildet hat, und unter der Nationalitat Minderheiten, die durch den Nationalstaat einverleibt wurden. Aber andererseits verstanden sie unter ersterer eine ideologische Allgemeinheit des Staates und unter letzterer besondere Interessen der Bourgeoisie, die nach aussen als ihr Nationalismus auftreten. Aber das Proletariat, das eigentlich kein Nationalinteresse habe, musse zunachst noch national handeln, solange es die politische Macht des Staates zu erobern gilt. Das deutsche Proletariat, das wegen der Zuruckgebliebenheit Deutschlands nicht unmittelbar die sozialistische, sondern zunachst die burgerlich-demokratische Revolution durchfuhren musse, sollte die Interessen der deutschen Bourgeoisie als deutsche Nationalinteressen anerkennen und zusammen mit ihr diese Interessen vertreten. Insofern lehnten Marx und Engels das Selbstbestimmungsrecht der osteuropaischen Minderheiten ab, das fur die nationale Einigung Deutschlands als Hindernis angesehen wurde. Marx und Engels teilten so etwa die Einstellung von Friedrich List, der in seinem Nationalen System der politischen Okonomie die Interessen der deutschen Bourgeoisie zum Ausdruck brachte. Das Selbstbestimmungsrecht der osteuropaischen Volker wurde geopfert, weil wegen der Zurilckgebliebenheit Deutschlands zunachst die burgerlich-demokratische Revolution hier durchgefuhrt werden musste. Der negativen Haltung von Marx und Engels gegenüber den "geschichtslosen Volker" in Osteuropa lag ohne Zweifel die materialistische Theorie der Nation und Nationalitat zugrunde.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19980700-0129">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19980700-0129</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# マルクス、エンゲルスにおける Nation 及 Nationalität ——四八年革命における「歴史なき民」の理論的背景について——

勝 又 章 夫

## 一、問題の所在

「諸国民の春」と呼ばれる一八四八年革命においてマルクスとエンゲルスが東ヨーロッパのナショナリズムに対して否定的な態度をとったことはすでによく知られている<sup>(1)</sup>。彼らによると、チェコやスロヴァキアなどの少数民族は歴史に対する貢献をすでに終えているか、そもそも歴史に対する貢献などしなかった「歴史なき民」であつて、もはや独立国家を建設する権利を持たないとい<sup>(2)</sup>う。しかしながら、この「歴史なき民」論の理論的背景はこれまで必ずしも明らかにされてきたわけではない。ミシエル・レヴィが述べているように、「マルクスは、民族問題に関する体系的な理論、国民 Nation という概念の明確な定義を提供しなかつたし、この領域における

プロレタリアートの一般的な政治戦略も提供しなかつた<sup>(3)</sup>。だが、「国民」とは東ヨーロッパの問題であるだけでなく、西ヨーロッパの問題でもあるのだから、歴史を包括的に捉えようとした唯物史観は「国民」に関する示唆を含んでいるはずである。

本稿の課題は、第一に、「歴史なき民」を整合的に理解するための理論的背景を示すことである。ここでは、マルクスとエンゲルスにおける国民概念の基本的な意味と、国民概念がマルクスの国家論、革命論のなかで果たす役割が考察される。第二に、マルクスとエンゲルスの「歴史なき民」論を歴史的に位置づけることである。ここでは、マルクスの思想的発展をドイツの後進性に対する対応と捉え、そのなかでマルクスの国民概念が遂げた展開が示される。その際、三月前期という同時代を生き

た思想家フリードリヒ・リストとの比較が中心となる。保護貿易によるドイツの経済的發展という対照的な主張をしながらも、「歴史なき民」と類似した植民論を展開したリストと比較することによって、マルクスの歴史的特殊性が明らかにされると思われる。

## 二、マルクス、エンゲルスの国民概念

東ヨーロッパの諸民族に関してマルクスとエンゲルスが二つの術語を用いていたことはすでに知られている。例えば、エンゲルスは「ドイツと汎スラヴ主義」において次のように述べている。チェコ人等の「これら諸民族 Nationalität は、もっぱらオーストリアの地に居住しているとはいえず、別個の国民 Nation を構成するものとは認められていない。彼らはドイツ国民ないしハンガリー国民 Nation の付録と見なされており、実際、彼らはそれ以上のものではないのである。」<sup>(4)</sup> さしあたりこの一節から分かることは、独立国家を建設できない「歴史なき民」は「民族性 Nationalität」と呼ばれ、他方、その独立が支持されるべきドイツ国民、ハンガリー国民は文字どおり「国民 Nation」と呼ばれるということである。我々の課題は、これら二つの術語の概念的な内容を探る

ことである。ここでは、主として「フリードリヒ・リストの著書『政治経済学の国民的体系』について」(以下「リスト草稿」と『ドイツ・イデオロギー』<sup>(5)</sup>、『共産党宣言』)を中心として、マルクスとエンゲルスにおける国民概念を再構成したい。<sup>(6)</sup>

『ドイツ・イデオロギー』によれば、人類史の前提は生きた人間諸個人の存在である。人間が生きるためには、食べる、飲む、着る、住む、という基本的な欲求が満たされなくてはならない。この欲求を満たす手段の生産は社会的関係として、他者との交通として現れる。つまり生産は個人によって行われるのではなく、社会的に行われる。そしてこの社会は、相互に交通しあう諸個人の総体として、一つの単位をなしている。これが「国民 Nation」と呼ばれるのである。<sup>(7)</sup> この「国民」とは近代諸国民だけでなく、社会的生産の単位となる社会を指す術語として通時的に用いられるが、その指示内容は古典派経済学における国民と大きく異なるものではなく、マルクスの独自性を表すものではない。<sup>(8)</sup>

マルクスとエンゲルスの国民概念を理解するためには、国家と大工業との関係を見ておく必要がある。まず国家と国民の関係を明らかにしておきたい。『ドイツ・イデ

オロギー』において国家の成立は諸個人の利害と諸個人の共同利害の矛盾から説明されている。この矛盾から共同利害が諸個人の個別的利害、社会全体の利害から自立し、国家を形成するというのである。しかし、国家として自立した共同利害は同時に幻想的な共同性という姿も取るという。それ故、支配階級の地位を目指す革命的階級は社会全体の代表として登場し、自らの利害を国家において社会全体の普遍的な利害として表現しなくてはならないということになる。<sup>(9)</sup>ここから国家における「国民」の役割が明らかになる。すでに述べたように、市民社会の単位となる社会は「国民」と呼ばれるのだから、支配権を求める階級は自らを「国民」の代表として組織し、自らの利害を国民的なものとして表現しなくてはならないのである。これは当然ブルジョアジーにもあてはまる。『ドイツ・イデオロギー』では次のように述べられている。「ブルジョアジーは、もはや身分ではなく階級なのであるから、地域的なものとしてではなく、国民的 national なものとして自らを組織し、自らの平均的利害に普遍的な形式を与えなくてはならない。<sup>(10)</sup>」国家と支配階級の関係をこのように理解するならば、「国民」<sup>(11)</sup>とは国家における幻想的な普遍性であると言えるだろう。

次に「国民」と大工業の関係を検討したい。歴史を市民社会の歴史として把握する唯物史観において、国民概念の位置は大工業によって規定されている。なぜなら、大工業によって近代国民国家が形成されると同時に、大工業は世界市場を形成することによって、人間諸個人を「国民」から解放する可能性を与えるからである。

国民国家は大工業とブルジョアジーに対応した国家として成立する。ブルジョアジーは人口と生産手段を集中させ、農村を都市に従属させる。また鉄道と商業の発展に伴い、「地域社会 Lokales」、<sup>(12)</sup>「民族性」と呼ばれる閉鎖的な地域社会は自立性を失い、相互に結びつけられる。経済力の集中には政治的な中央集権化が対応し、経済と政治の集中にともなって、様々な方言から「国民言語 Nationalsprache」<sup>(13)</sup>が成立する。このような国民国家の形成過程についてマルクスは『共産党宣言』において次のように述べている。「別々の利害、法律、政府、関税を持った、単に同盟関係にあるにすぎない独立した諸州は、一つの国民 Nation、一つの政府、一つの法律、一つの国民的階級利害、一つの関税制度へと圧縮される。<sup>(14)</sup>」これらの国民国家の形成に関するマルクスとエンゲルスの言明から「国民 Nation」と「民族性 Nationalität」の基

本的な区別が明らかとなる。国民国家として組織された「国民」は、国内的にはブルジョアジーの利害を「一つの国民的階級利害」として表現し、対外的には関税制度によって世界市場における一定の自立性を維持している。他方で、「民族性」は国民国家の形成過程でそこに吸収される地域的な社会にすぎない。歴史が市民社会の歴史と理解される限り、「民族性」はまさに「歴史なき民」と把握されることになる。

国民国家によって吸収される「地域社会 Lokaltät」は、マルクスとエンゲルスにおいてしばしば「自然発生的」「野蛮」と形容されており、分業と交換が未発達な地域社会を指すものと考えてよい。<sup>(15)</sup>これに対して、国民国家は地域社会の自立性と国内の関税障壁を廃止し、「国民」の内部に自由競争をもたらすという。『ドイツ・イデオロギー』によれば、「国民」の内部における自由競争は市民革命を通じて実現する。<sup>(16)</sup>この「国民」を未熟な生産様式の克服と市民革命によって成立するものと理解するならば、国民概念の意味はさらに明確になる。「国民」とは、確かに、市民社会の単位として通時的に用いられる術語ではある。しかし、本来の意味における「国民」は、市民革命によって国民国家が形成され、ブ

ルジョアジーが「地域的なものとしてではなく、国民的なものとして自らを組織」したときに成立すると考えられている。このようにして成立した「国民」という概念は歴史理解にも用いられる。本来の意味における「国民」は発達した市民社会を表す概念であるが、未発達の世界市場を分析するための鍵として用いられるのである。

大工業は国民国家を形成するだけでなく、世界市場も作り出す。なぜなら、市民社会は、商業的・工業的生活のすべてを含み込んでおり、「その限りで、国家と国民を超越している」<sup>(17)</sup>からである。『ドイツ・イデオロギー』によれば、すでにマニファクチュア時代において諸「国民」は競争関係に置かれていたが、競争は関税、禁止制などによって可能な限り制限されていたという。しかし、大工業は競争を一般化し、実質的な自由競争と世界市場を生み出す。国民国家の成立過程で地域社会が破壊されたのと同じように、世界市場は、古い国民的な工業を破壊し、あらゆる「国民」に対してブルジョアジーの生産様式を押しつける。同時に大工業は「すべての文明的国民とその中の諸個人を、その欲求を充足することによって、全世界に依存させ、個々の国民のそれまでの自然発生的な排外性を破壊する」<sup>(18)</sup>もちろん国民的

制約は伝統的工業に限られるものではなく、理論、哲学、宗教などの精神的産物にも現れるのだから、<sup>(19)</sup>このような国民的偏狭さも大工業と世界市場の成立によって不可能となる。マルクスは『共産党宣言』において次のように述べている。「個々の国民の精神的産物は共通の財産となる。様々な国民的、地域的文学から一つの世界文学が成立する。<sup>(20)</sup>」

このように国民的制約が大工業によって取り壊されることを、マルクスとエンゲルスは歴史的に進歩的なことと見なしている。個人の精神的な豊かさとは、その個人の現実的な諸関係の豊かさによって規定されると考えられたからである。世界市場の成立によって、「個々の個人は初めて様々な国民的ないし地域的な制約から解放され、全世界の生産物（及び精神的生産物）と実際に関係するようになり、全世界の多面的な生産物を享受することができるようになる。<sup>(21)</sup>」つまりマルクスとエンゲルスにとって、解放されるべきなのは国民ではなく、人間諸個人が国民から解放されなくてはならないのである。その前提は大工業と世界市場によって与えられる。後にマルクスはインドにおけるイギリスの植民地政策に進歩的意義を認めることになるが、そのための理論的基礎はす

でに『ドイツ・イデオロギー』において与えられている<sup>(22)</sup>と言える。

大工業はブルジョアジーの支配する生産力であるが、ブルジョアジーは人間を国民から解放することはできない。なぜなら、「すべての国民のブルジョアジーは特別な国民的利害を維持<sup>(23)</sup>」しており、市民社会は「対外的には民族性として現れ、内に向かつては国家として自らを組織<sup>(24)</sup>」しなくてはならないからである。このようにブルジョアジーが国民的であるのは、世界市場におけるブルジョアジー相互の競争のためである。この点についてマルクスは「リスト草稿」において次のように指摘している。「ブルジョアは、個々のブルジョアが他のブルジョアとどれほど争っているとしても、階級としては一つの共同の利害を持っており、この共同性は、内に対してはプロレタリアートに向けられ、対外的には他の国民のブルジョアに向けられている。この共同性のことをブルジョアジーは自分の民族性 Nationalität と呼ぶのである。<sup>(25)</sup>」「民族性」とはブルジョアジーの対外的利害共同体と理解することができる。<sup>(26)</sup>これは「民族性」の第二の規定である。そもそも国民国家は様々な「民族性」を統一することによって成立したものであるが、世界市場にお

いて諸「国民」は再び「民族性」として互いに向き合うことになる。このような意味で理解される限り、「民族性」をナシヨナリズムという今日的な術語で言い換えることができる<sup>(27)</sup>。

他方で、大工業は世界史的な階級としてのプロレタリアートを生み出す。『ドイツ・イデオロギー』では次のように述べられている。プロレタリアートは「あらゆる国民 Nation において同じ利害を持ち、この階級の下では民族性 Nationalität はすでに無効とされている」<sup>(28)</sup>。プロレタリアートが「国民」という枠組みを越えて共通の利害を持っているのは、大工業がどの「国民」の内部にも同じ労働条件を押しつけるからである。またプロレタリアートの利害はどの「国民」においても共通なのだから、他の「国民」に対して「民族性」を主張する必要がない。それ故、ブルジョアジーが決して「民族性」を乗り越えられない一方で、「プロレタリアートだけが民族性 Nationalität を廃止することができるし、成長しつつあるプロレタリアートだけが諸国民 Nation を親睦させることができる<sup>(29)</sup>」とエンゲルスは述べている。つまり、「プロレタリア革命が初めて人間を国民的制約から解放する」というわけである。

ここで当初の問題、すなわち、マルクスとエンゲルスが「国民 Nation」と「民族性 Nationalität」という二つの概念をどのように区別していたのか、という問題に答えることができると思われる。第一に、「国民」と「民族性」は分業と交換の発展水準によって、言い換えれば、市民社会の発展水準によって区別されている。この点では、「国民」が近代国民国家として組織されているのに対して、「民族性」は国民国家に吸収される地域社会にすぎない。第二に、「国民」と「民族性」はイデオロギー的に区別されている。『共産党宣言』においてマルクスは次のように述べている。「プロレタリアートはまず第一に政治権力を獲得し、自らを国民的階級 nationale Klasse にまで高め、自らを国民 Nation として構成しなくてはならないのだから、ブルジョアジーの意味ではないにしても、それ自身なお国民的である」<sup>(30)</sup>。「国民」とは国家における幻想的な普遍性のことであり、国家の支配を確立しようとする階級はすべて、自らの特殊な利害を普遍的利害、国民的利害として表現しなくてはならない。それ故、ブルジョアジーだけでなく、プロレタリアートも「なお国民的である」。他方、「民族性」とはブルジョアジーの対外的利害共同体のことである。「民族

性」をこのように理解するならば、プロレタリアートが「民族性」の解消を表現しており、プロレタリアートの国民的性格が「ブルジョアジーの意味ではない」ということは明白である。プロレタリアートが国民的であるのは国家権力を獲得しようとする限りであって、ブルジョアジーのように対外的利害共同体としての「民族性」を持たないからである。

マルクスとエンゲルスにおける国民概念の基本的構想は以上のようなものであった。しかし国民概念は国家論と密接に結びついている以上、革命論の変遷にもなつて、その実践的機能を変化させることになる。我々の次の課題は国民概念の成立過程と機能変化を検討することである。

### 三、革命論と国民概念

唯物史観を初めて展開した『ドイツ・イデオロギー』において革命論は以下のように定式化されている。「支配権を獲得しようとする階級はすべて、プロレタリアートの場合のように、その支配が古い社会形態の全体と支配一般の廃止をもたらすとしても、最初の瞬間はやむを得ないことだが、自らの利害を再び普遍的なものとして

表現するために、まず第一に政治権力を獲得しなくてはならない。<sup>(31)</sup>すでに述べたように、支配権を求める階級は社会全体の代表として登場しなくてはならないのだから、国家における普遍的利害とは国民的利害と言い換えることができる。従って、ここでは国民概念がマルクスの革命論の一環に組み込まれていることが分かる。しかしマルクスは、政治権力の獲得を革命の条件とする政治革命論の立場を初めから取っていたわけではない。それ故、マルクスの革命論の変遷をたどることによって、国民概念をマルクスの理論的發展のなかに位置づけることができよう。

政治的革命とは、マルクスによれば、「市民社会の一部が自らを解放し普遍的支配に到達することである。<sup>(32)</sup>」マルクスはすでに一八四三年のクロイツナハ時代にこのような見解を獲得していた。当時マルクスはフォイエルバッツハの「哲学改革のための暫定的テーゼ」をヘーゲルの法哲学に応用して、ヘーゲルにおける国家と市民社会の主語・述語関係を転倒し、市民社会が国家を規定するという結論を引き出していた。マルクスは主語と述語の転換を歴史のなかにも見いだしている。ランケに対する評注においてマルクスは次のように述べている。「主語



の述語への転換、述語の主語への転換、規定するものと規定されるものの交換が常に最初にくるべき革命である。<sup>(33)</sup>「すなわち、革命とは市民社会の特殊的利害が国家の普遍的利害を規定することである。

しかし、特殊的利害が国家の普遍的利害を規定するという政治的革命はまだマルクスの立場ではない。なぜなら政治的革命は政治的国家と市民社会の分裂という近代の二元論を前提しているからである。マルクスは『ヘーゲル国法論批判』において、この二元論の克服を民主制のうちに見ていた。民主制においては政治的国家と市民社会は揚棄されており、その国家形態としての共和制は「政治的にすぎない体制であることを止めている」という。<sup>(34)</sup>それ故、この民主制はフランス革命によって確立された共和制とは明らかに異なる。<sup>(35)</sup>フランス革命の確立した共和制は政治的国家の領域における政治的共和制であり、むしろ近代の二元論はフランス革命によって完成されたからである。<sup>(36)</sup>それは政治的にすぎない革命であった。二元論の克服を目標とする以上、マルクスは普遍的、人間的解放、社会革命の立場に立たざるを得ない。

革命が政治的にすぎない革命にとどまるわけにはいかないとしても、革命は政治的活動、既存の権力の転覆を

要求する。この点では、後にマルクスがルーゲとの対決において明らかにしたように、あらゆる革命は政治的である。<sup>(37)</sup>一見すると、この見解は社会革命と矛盾するようにも見えるが、社会革命と政治革命の関係についてマルクスは『経済学Ⅱ哲学草稿』において次のように説明している。「私的所有、隷属からの社会の解放は労働者の解放という政治的形態で現れる。というのは、労働者の解放だけが問題であるというのではなく、労働者の解放のうち普遍的、人間的解放が含まれているからである。<sup>(38)</sup>」政治的革命を視野に入れたとはいえ、マルクスにとって社会革命は最終目標として維持されており、政治的活動はその前提とされている。つまり、政治的にすぎない革命を拒否し社会革命を要求する立場から、社会革命の前提としての政治的革命を認める立場への転換が生じたのである。この革命が成功するためには、プロレタリアートが社会全体の代表として登場し、自らの特殊な利害を国家において普遍的な利害として表現しなくてはならない。しかし、政治革命は社会革命の前提にすぎない。これがマルクスの政治革命論である。ここで初めて国民概念はマルクスの革命論のなかに組み込まれる。<sup>(39)</sup>

政治革命論が明確に展開される『ドイツ・イデオロ

ギー』では世界同時革命が構想されている。ブルジョア  
ジーとプロレタリアートはそれぞれ世界史的存在だから  
である。ここに政治権力の奪取という特殊目標が差し挟  
まれると、プロレタリア革命はさしあたり個々の国家内  
部で遂行されなくてはならない。同時革命と政治革命の  
関係は『共産党宣言』では内容と形式の関係として説明  
されている。「内容からではないが、形式から言えば、  
ブルジョアジーに対するプロレタリアートの闘争はさし  
あたり国民的である。当然、個々の国のプロレタリアー  
トはそれ自身のブルジョアジーを片づけなくてはならな  
い。」<sup>(40)</sup>もちろんその場合はそれぞれの国の特殊条件が考  
慮されなくてはならない。ドイツにはドイツの特殊条件  
があり、一国内における権力の奪取、政治革命という特  
殊目標をたててドイツに目を向けるならば、なによりも  
この特殊条件、すなわち「ドイツ的惨めさ」を克服しな  
くてはならないことになる。この現状を覆すことのでき  
る階級がドイツに存在しているだろうか。エンゲルスは  
この問題に次のように答えている。「それは存在してい  
る。イギリスやフランスのそれに対応する階級と比べる  
とはるかに小市民的なあり方ではあるが、とにかく存在  
している。まさにブルジョアジーという姿で。」<sup>(41)</sup>プロレ

タリア革命の前提はなによりもプロレタリアートの存在  
であり、プロレタリアートがブルジョアジーによって生  
み出されなくてはならない。また、ブルジョアジーが封  
建勢力を一掃することによって、来るべきプロレタリア  
革命は普遍的な革命となりうる。それ故、プロレタリ  
アートも当面はブルジョアジーを支持しなくてはならな  
いということになる。マルクスは、「労働者はブルジョ  
ア革命に労働者革命の条件として参加することができる  
し、また参加しなくてはならない」<sup>(42)</sup>と述べている。

二段階革命論はこのようにして成立した。<sup>(43)</sup>この二段階  
革命論が彼らの国民概念の機能を変化させるのである。  
すでに見てきたように、国民概念の基本構想において  
「国民 Nation」とは解放されるべきものではなく、むしろ  
克服されるべきものである。それが意味を持ちうるの  
は、国家における幻想的な普遍性としてであり、ブル  
ジョアジーの利害共同体にすぎない「民族性 National-  
ität」にプロレタリアートは関心を持たない。しかしプ  
ロレタリア革命の前提としてブルジョア支配を確立しな  
くてはならないとすると、「民族性」はその限りで積極  
的な意味を与えられる。エンゲルスは述べている。「一  
つの階級が、全国国民 Nation の成功を自らの成功に依存

させ、他のすべての階級の利害の進展を自らの利害の進展と発展に依存させることができるほど強力にならなくてはならない。この一つの階級の利害がさしあたり国民的利害 Nationalinteresse となり、この階級がさしあたり国民の代表とならなくてはならない。<sup>(44)</sup>この階級とはブルジョアジーのことである。ブルジョアジーの利害を国民的利害として支持するということは、ブルジョアジーの対外的利害共同体としての「民族性」、ナシヨナリズムを支持することにほかならない。

ドイツ・ブルジョアジーの第一の要求がドイツの国民的統一であることは言うまでもない。「ブルジョアの観点からのみ考えても、ドイツが矛盾なく統一されるといふことは、ドイツをこれまでの惨めさから救い、国富を作り出す第一の条件である。」<sup>(45)</sup>統一ドイツにはボヘミアも編入されることになっていた。ボヘミアのチェコ・ブルジョアジーが進歩的とみなされるのは、ボヘミアが統一ドイツに参加する限りである。しかしチェコ・ナシヨナリズムの指導者パラツキーはフランクフルト国民議会への出席を拒否し、オーストリアにおけるチェコの自治を要求した。このような要求はドイツ・ブルジョアジーの利害と対立する要求であり、チェコ・ブルジョアジー

が別個の利害共同体、すなわち「民族性 Nationalität」を形成するものとみなされうる。<sup>(46)</sup>「蜂起がどのように終わるとしても、今ではドイツ人によるチェコ人の絶滅戦争が唯一の可能な解決である」という発言は単に歴史的状況に還元されるのではなく、マルクスとエンゲルスの国民概念に照らして理解されなくてはならない。

このような見解にもかかわらず、エンゲルスはチェコの民主主義的、革命的民衆と「チェコ党」を支持している。<sup>(48)</sup>マルクスとエンゲルスが一八四四年の労働者蜂起以来、ボヘミア労働運動を支持してきたことは周知の事実である。しかし、それは、ボヘミア労働運動がシュレージエン蜂起と並んで、ドイツにおけるプロレタリアートの成立を示している限りである。<sup>(49)</sup>このことから、マルクスとエンゲルスにおける「民族性 Nationalität」という概念は言語や文化によって規定される「文化国民 *Culturalnation*」とは異なる概念であるということが分かる。つまり、ブルジョアジーの対外的利害共同体という階級的規定によってのみ、「民族性」は階級闘争のなかに位置づけられるのである。民族闘争を階級闘争に従属させるといふ「民族ニヒリズム」<sup>(50)</sup>はここに由来している。プロレタリアートとブルジョアジーの階級闘争は世界史的

な闘争である。ここにブルジョア民主主義革命という部分的な目標が組み込まれることによって、プロレタリアートの成長にとって有利な「国民」と、プロレタリアートの形成にとって意味を持たない「歴史なき民」を区分することが必要となる。「歴史なき民」とは、世界的な普遍的解放という目標とブルジョア民主主義革命という現実的な政策との狭間で必然的に生じる帰結であると言えよう。

二段階革命論はマルクスとエンゲルスの国民概念、とりわけ「民族性[Nationalität]」の実践的機能を変化させるだけではない。これによって、政治的革命、フランス革命に対する評価も変化することになる。すでに明らかにしてきたように、政治的革命はマルクスの最終目標とはなりえない。目標は近代の二元論の解消、社会革命である。それ故、マルクスは「所有関係における不正は権力によって維持されている」と主張したカール・ハインツェンや、共和主義的伝統から抜け出せない「レフォルム」誌を批判したのである。<sup>(52)</sup>しかし、革命の課題は個々の「国民」の発展段階に応じて異なるのだから、遅れてきた「国民」にとってはフランス革命は来るべき革命のモデルとなりうる。例えば、ガリツィアにおける土地改

革は、一七八九年の土地改革がフランス農民に対して持っていた意味と同じ意味を持つている。<sup>(53)</sup>またマルクスはフランス革命期のブルジョアジーを基準にして四八年革命におけるドイツ・ブルジョアジーを批判している。<sup>(54)</sup>

このようにフランス革命を肯定的に評価することによって、マルクスとエンゲルスは、国民国家の建設、政治権力の集中というブルジョア民主主義革命の要求を貫こうとする限りで、ジャコバン派の政策を引き継ぐことができる。<sup>(55)</sup>ジャコバン派は、バレールとグレゴワールの報告に見られるように、フランス国内の少数言語を弾圧したが、これが「歴史なき民」の抑圧を正当化することになる。エンゲルスは南フランスに対する抑圧に関して次のように述べている。「南フランスに対する北フランスの専制は三百年続き、その後で初めて北フランス人はその抑圧の償いをした。南フランスの自立性の最後の残りを抹殺することによって償ったのである。憲法制定議会が南フランスの独立諸州を粉碎し、国民公会の鉄の拳が南フランスの住民を初めてフランス人にした。民族性[Nationalität]の代償として彼らには民主主義が与えられた。」南フランスに対するこのような暴力が正当化されるのは、「南フランスがフランスにおける反動的な部分」

となつたからであり、「北フランスに反対することは、フランス全体の進歩的階級に反対すること」だからである。<sup>(56)</sup>ここでフランス革命は、地域的に自立した社会としての「民族性」を破壊し、国民国家を形成する過程として理解されていることがわかる。東ヨーロッパで南フランスと同じ運命を受け入れなくてはならないのは、言うまでもなく、チェコやクロアチアなどの「歴史なき民」である。他方で、エンゲルスはコッシュートとハンガリーをジャコバン派時代のフランスと重ね合わせている。<sup>(57)</sup>

#### 四、三月前期におけるマルクスとリスト

民族自決権を当然の権利として承認している今日の我々から見ると、マルクスとエンゲルスの「歴史なき民」に関する見解は奇異に映る。しかもレーニンが民族自決権を民族の自然権とみなしているだけに、ますますその感が深まる。しかし、マルクスの生きた十九世紀において、民族自決権は必ずしも自明の権利ではなかった。例えば、ジョン・スチュアート・ミルは、ブレトン人やバスク人などの少数民族に関して、フランス国民の一部となる方が有利であるとして、少数民族の自決権に対しては否定的である。<sup>(58)</sup>この主張の背景にあるのは、ある一

定の国土と人口を有する民族にのみ自決権が与えられるという思想である。ホブズボームはこれを「閥値原理」と呼び、<sup>(59)</sup>その代表的理論家としてドイツの保護貿易論者フリードリヒ・リストを挙げている。リストは次のように述べている。「小国家は領土の内部で様々な生産部門を十分に発展させることはできない。小国家は、より強力な諸国民と同盟することによって、部分的には国民 Nationalität の利益を犠牲にすることによって、懸命な努力によって、かろうじて自立を主張できるにすぎない。」<sup>(60)</sup>しかし、我々がリストに注目するのは、「歴史なき民」との類似性のためだけではない。マルクスとリストは三月前期における「ドイツ的惨めさ」という共通の問題に直面し、その結果として共通の結論に到達したからである。<sup>(61)</sup>

諸領邦に分裂し、経済的にもイギリスにはるかに遅れをとっていたドイツの後進性は、マルクスとリストにとって理論形成の根底に存していた。リストは『政治経済学の国民的体系』の序文において次のように述べている。「もし著者がイギリス人であったならば、アダム・スミスの理論の根本原理を疑うことは困難だったろう。二十年以上も前にその理論の無謬性への疑いを著者のう

ちに引き起こしたのは、まさに祖国の現状だったのである。<sup>(62)</sup> リストの経済学の目的はまさにドイツの現状を克服することであった。他方、マルクスは、イギリスやフランスではすでに社会主義が現実の課題となっている時に、ようやく資本主義の確立が要求されているドイツの現状に言及し、リストをその理論的表現と見なしていた。<sup>(63)</sup>

現状認識の一致にもかかわらず、後進性に対する二人の対応は対照的である。リストが保護貿易によってイギリスの圧倒的な経済力に対抗しようとしたのに対して、マルクスは「普遍的、人間的解放」、すなわち社会革命の必要性を説いている。しかし、マルクスはエンゲルスとともにドイツの後進性の解決策を模索するにつれて、リストと共通するような主張を展開するようになる。この変化はマルクスとエンゲルスがドイツの後進性への認識を深めていく過程であると思われる。

マルクスとエンゲルスのリストに対する関係を検討する前に、『政治経済学の国民的体系』におけるリストの主張を概観しておきたい。リストによると、スミスの経済学は生産者、消費者としての個人を単位としており、世界はこれらの諸個人の総体とされている。リストはこれを「万民経済学」と呼んでいる。それはあらゆる局面

マルクス、エンゲルスにおける Nation と Nationalität

において諸個人の自由競争を条件としており、自由競争を分析するのが交換価値の理論である。しかしリストによれば、このような全面的な自由競争は現実の世界においては不可能であるという。個人と世界の間には様々な発展段階にある「国民 Nationalität」が存在するからである。「文化的に進んだ一つの国民の下で自由競争が両国民に有効に作用するのは、両国民がおよそ同じくらい産業形成の地点にあるときだけ」<sup>(64)</sup> なのだから、経済格差を埋めるためには、「ある所与の国民が所与の世界の諸関係のなかで、どのようにして農業、工業、商業によつて裕福、文明、力を獲得するかを教える」<sup>(65)</sup> 「政治経済学」が必要となる。これがリストの国民経済学であり、その目標がドイツの経済的發展にあったことは言うまでもない。

万民経済学と交換価値の理論に対置されたリストの政治経済学は「生産力の理論」を実質的な内容としている。それは分業の原理を補完するものであり、リストは次のように説明している。「生産性は、多数の諸個人の下で様々な作業工程を分割することだけでなく、むしろこれらの諸個人を共通の目的へと精神的、身体的に統一することにより多く存している」<sup>(66)</sup> 分業は工場の内部に限ら

れるものではなく、一国民全体に應用されうるものである。農業と工業の分業だけでなく、精神的作業をも含めた一国民の全生産力に「国民の福祉 National Wohlstand」<sup>(67)</sup> という共通の目的を与えて統一すること、これをリストは「生産諸力の国民的結合」と呼んでいる。生産諸力に一定の秩序と目的を与えるのは国民なのだから、リストの経済学は国民を単位としていると言える。

マルクスのリストへの関心は意外に古く、このことは、『経済学批判』の序文においてマルクスが経済学研究を始めたきっかけの一つとして自由貿易と保護関税に関する論争を挙げていることからわかる。<sup>(68)</sup> 『ライン新聞』としばしば論争していた「アウグスブルガー・アルゲマイン・ツァイトウング」にはリストが寄稿しており、マルクスは『ライン新聞』の編集をしていた四二年から四三年当時すでにリストの主張に習熟していたと推測される。<sup>(69)</sup> 事実、彼らの手紙とノートから分かるように、<sup>(70)</sup> 四四年から四五五年の春にかけて、マルクスとエンゲルスはリスト批判を企てており、エンゲルスの「エルバーフェルトの演説」と一八四五年八月末頃から執筆されたマルクスの「リスト草稿」はその成果と考えられる。<sup>(71)</sup>

マルクスが「ヘーゲル法哲学批判序説」にリスト批判

を挿入することができたのは、「独仏年誌」の編集者としてエンゲルスの「国民経済学批判大綱」を事前に読んでいたからであると推定されている。それ故、エンゲルスの「大綱」はリスト批判の出発点とみなされうる。エンゲルスの「大綱」の目的はスミスの自由貿易論、自由主義経済の批判である。エンゲルスによるスミス批判はリストのそれと一致するようにも見えるが、エンゲルスとリストの立場は明らかに異なる。リストは重商主義の復興者とみなされているが、エンゲルスは自由主義経済と重商主義の対立を越えた立場にあり、両者に共通する前提としての私的所有の批判を目的としているからである。また、エンゲルスは重商主義と対比しながら自由主義経済、自由貿易論の進歩的意義を指摘している。自由主義経済が「民族性 Nationalität」を解消し、敵対関係を普遍化する<sup>(72)</sup> ことによって、「我々の時代の闘争は普遍的、人間的闘争となることができた」<sup>(73)</sup> のだから、自由主義経済は普遍的、人間的闘争、社会革命の前提という意義を持っている。それに対してリストのスミス批判は過去からの批判にすぎないとみなされている。

リストのスミス批判が過去からの批判となった背景には、明らかにドイツの後進性の問題がある。事実、マル

クスは「リスト草稿」においてリストの国民経済学をドイツの現状から説明している。マルクスによれば、経済学の発展は社会の現実の運動と結びついている。なぜなら、経済学の出発点は市民社会であり、経済学とは市民社会の現実に対応する表現を与えたものだからである。

「ドイツのブルジョアは遅れて登場したので、イギリス人とフランス人によって汲み尽くされた国民経済学をさらに進めることは不可能である。」<sup>(74)</sup> リストに理論的な新しさが無いのはそのためであり、マルクスはリストを大陸封鎖期の保護貿易論者フェリエの剽窃と見なしている。<sup>(75)</sup>

マルクスはリストをドイツにおける後進性の理論的表現とみなすと同時に、リストの生産力論を脆弱なドイツ・ブルジョアジーの階級的利害の反映とみなし、これを厳しく批判している。リストの生産力論に対するマルクスの批判は次のように要約することができるだろう。ブルジョアジーの目的は交換価値の獲得である。そのためにドイツのブルジョアジーは国家による保護関税を必要とする。しかもドイツのブルジョアジーは国家権力を自由にできないので、貴族や官僚に対して妥協的な態度を取らざるを得ない。しかしブルジョアジーの階級的利害は他の階級と対立している。なぜなら、保護関税に

よって外国の安価な商品を閉め出すということは、国民に犠牲を強いることであり、工業の発展は古い社会秩序を破壊してしまうからである。ドイツのブルジョアジーが交換価値を獲得するということは、「もはやイギリス人ではなく、ドイツのブルジョアが自ら同胞を搾取する」<sup>(76)</sup> ということを意味するにすぎない。国民の名のもとに主張されるリストの生産力論は、このような階級的利害対立を覆い隠す役割を果たしている、と。リストの生産力論に対するこのような批判から、この時期のマルクスはドイツ・ブルジョアジーになんら進歩的役割を認めていないということが分かる。しかしドイツ・ブルジョアジーに対するマルクスとエンゲルスの批判的立場は、二段階革命論の成立によって根本的な転換を迫られることになる。

すでに「国民経済学批判大綱」においてエンゲルスが述べているように、自由主義的経済学が普遍的、人間的闘争の前提である以上、マルクスとエンゲルスは原則的に自由貿易論を支持する立場にある。マルクスは次のように述べている。「自由貿易はこれまでの民族性 *Nationalität* を破壊し、プロレタリアートとブルジョアジーの対立を頂点にまで押し進める。言い換えれば、自由貿易



易は社会革命を促進する。この革命的な意味においてのみ、私は自由貿易に賛成するのである。」しかし保護貿易も無意味ではない。それは国内で大工業を発展させ、その国を世界市場に結びつける。またドイツのようにブルジョアジーがようやく登場してきた国では、「保護関税はブルジョアジーが封建制、絶対主義と戦うための武器である。」マルクスとエンゲルスはプロレタリア革命の前提としてブルジョア支配の確立を要求しているのだから、その限りで保護貿易を支持しなくてはならない。エンゲルスは次のように述べている。「プロレタリアー、無産者にとっては、保護貿易論者と自由貿易論者のどちらが決定的な発言権を握るかということとは、外見上どうでもいいことに見えるかもしれない。しかし、ドイツのブルジョアジーは封建的貴族……を駆除し、彼ら固有の最も深い本質を純粹かつ混じりけのない形で発展させるためには、対外的な保護を必要としているのだ。だから労働者階級もまた、ブルジョアジーを完全な支配につけてやるものに利益を持っているのである。」マルクスとエンゲルスの立場は、ドイツにおけるブルジョア民主主義革命を推進する限りで、リストと重なり合うことになる。<sup>(79)</sup>

統一国家のありかたに關してもリストとの共通点を指摘することができる。エンゲルスは「フランクフルトにおけるポーランド討論」において、次のように述べている。「言うまでもなく、ここで問題なのは見かけだけのポーランドを再建することではなく、生命力のある基礎の上に国家を建設することである。ポーランド人は少なくとも一七七二年の領土を持たなくてはならない。その大河の流域だけでなく河口をも持たなくてはならないし、少なくともバルト海に面して大きな沿岸地域を持たなくてはならない。」<sup>(80)</sup> また、ドイツによるシュレスヴィヒ・ホルシュタインの併合を「野蛮に対する文明の権利、停滞に対する進歩の権利」としてエンゲルスが支持したのも、シュレスヴィヒ・ホルシュタインが「陸海軍および商業上の理由からもドイツに必要」<sup>(82)</sup> だったからである。このようなエンゲルスの主張は、一定の国土と沿岸地域の領有を国家建設の必須条件とする点で、リストの「規範的国民 die normalmäßige Nation」と一致する。リストは『政治経済学の国民的体系』において次のように述べている。「大きな人口と、様々な天然資源を備えた広い領土は規範的国民の本質的な要件である。それらは精神的教養、物質的發展、政治的権力の根本条件である。

…沿岸地域、海運、海軍を持っていなかったり、河の河口を支配下に置いていない国民は、外国貿易において他の国民に従属する<sup>(83)</sup>。」

リストの「規範的国民」には「植民地を建設する能力」が備わっていない。リストがドイツ人の植民に適した背後地として選択したのは東ヨーロッパである。ここに「歴史なき民」と酷似した植民論が生まれる<sup>(84)</sup>。リストによれば、オスマン帝国が崩壊した場合に、その地域を引き継ぐのはスラヴ人ではなく、黒海からアドリア海に広がるドイツ＝マジャール東方帝国である<sup>(85)</sup>。

その際、スラヴ系少数民族の自決権は考慮されてはいない。リストの植民論の背景となっているのはロシアの膨張だが、ロシアの脅威は東ヨーロッパにおける「歴史なき民」の直接的な歴史的背景でもある。マルクスとエンゲルスもドイツの統一はロシアに対する戦争なしには不可能であると考えており、チェコなどのスラヴ系諸民族のナシヨナリズムはロシアを利するものと見なしていた。リストの「植民論」と「歴史なき民」の類似性は、ドイツの国民統一とロシアへの対抗という共通の目的に由来すると言えよう。

このように、マルクスとエンゲルスは二段階革命論を

マルクス、エンゲルスにおける Nation と Nationalität

採用することによつて、保護貿易論、「規範的国民」、「歴史なき民」ないし「植民論」において、結果的にリストと重なりあう。これらの政策上的一致が生じたのは、マルクスとリストの思想がドイツ三月前期の歴史的状況を反映していたからである。当時のヨーロッパはイギリスの経済的支配の下で一定の普遍性を獲得しつつあった。この普遍性によつて個々の地域の特殊性が自覚されるようになる<sup>(86)</sup>。このようなヨーロッパにおける普遍性と特殊性は、リストにおいては万民経済学と政治経済学として現れる。他方でマルクスにおいては、ヨーロッパが獲得した普遍性は同時革命の可能性として現れ、ドイツにおける特殊性は二段階革命論として表現されている。マルクスとエンゲルスはブルジョア革命を促進するためにリストと同じ結論に到達することになるが、彼らの政策が一致せざるを得なかったのは、三月前期の歴史的状況下で後進性というドイツの特殊性を克服しようとしたからであると言える。

## 五、結論

結論の第一点として、マルクスとエンゲルスにおける国民概念の成立時期を特定しておきたい。ブルジョア

ジューの対外的利害共同体としての「民族性 Nationalist」

が明確にされるのは、マルクスが一八四五年八月末頃から執筆を始めた「リスト草稿」においてである。一八四五年暮れに執筆されたエンゲルスの「ロンドンにおける諸国民の祝祭」においても「民族性」は現れることから、一八四五年の秋から冬にかけてマルクスとエンゲルスは「民族性」の指示内容に関して了解に達していたと考えられる。しかし、「Nationalität」とはリストの用語でもあることに注意しなくてはならない。すでに一八四四年の「独仏年誌」においてマルクスとエンゲルスはリストと重商主義を「民族性」という言葉で特徴づけており、このようなりスト批判の経験に基づいて、「リスト草稿」における概念規定が可能となったものと思われる。他方で、国家における普遍性としての「国民 Nation」は、国家権力が話題になっていながらもかかわらず、「リスト草稿」ではまだ登場しない。「国民」という言葉は用いられているが、それは古典派経済学に見られるような意味で使われているにすぎない。「国民」が国家と結びつけられるのは一八四六年の『ドイツ・イデオロギー』においてである。『ドイツ・イデオロギー』において理論的に基礎づけられた「国民」は『共産党宣言』でさらに

明確に展開されることになる。

このようにマルクス、エンゲルスの国民概念は国家論、革命論のなかに組み込まれており、「歴史なき民」を特定の政治状況下における発言へと還元することはできない。また、しばしば「歴史なき民」はエンゲルスの個人的発言と見なされてきたが、同じ理由から、この見解も退けられる。「マルクスを救う」ことは不可能であろう。二人の違いは二段階革命論の表現の仕方の違いであると思われる。マルクスの場合は、プロレタリアートとブルジョアジーの対決という普遍的構図が前面に現れるが、エンゲルスはドイツにおけるブルジョア民主主義革命という特殊性の側面を強調することが多い。この違いが「歴史なき民」をエンゲルスの問題に見せているのである。これが第二の結論である。

第三に、マルクスとエンゲルスは二段階革命論を採用することによつて、ブルジョア・ナショナリズムを支持するが、この路線転換は非本質的な修正とみなされるべきではない。確かに、マルクスとエンゲルスは原則的にプロレタリア国際主義を主張したが、共産主義の理念が単なる理念に終わるのではなく、実現されなくてはならないのであれば、そのための実践的な修正も必然的な理

論展開と考えるべきであろう。つまり、後進国革命にはナシヨナリズムが内在しており、プロレタリア国際主義はナシヨナリズムによって媒介されざるを得ないのである。

註

- (一) マルクス主義研究において「歴史な市民」は周辺的な分野ではあるが、古典的な研究に加えて新しい研究も蓄積されていく。Hermann Wendel, *Der Marxismus und die Südslawenfrage*, in: ders., *Aus der Welt der Südslawen*, Berlin 1926; Roman Rosdolsky, *Friedrich Engels und das Problem der "geschichtslosen" Völker*. Die Nationalitätenfrage in der Revolution 1848-1849 im Licht der "Neuen Rheinischen Zeitung", in: *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd. 4, Hannover 1964; Wolfram W. Swoboda, *The Changing View of Marx and Engels about the Nationalities in the Austrian Monarchy, 1845-1855*, in: *Austrian History Yearbook*, vol. 9-10, Minnesota 1973-74; Ian Cummins, *Marx, Engels and the National Movements*, London 1980; Andrzej Walicki, *Philosophy and Romantic Nationalism. The Case of Poland*, Oxford 1982; Z.A. Pelczynski, *Nation, civil society, state*. Hegelian sources of the Marxian non-theory of nationality, in: *The State and Civil Society*, (ed.) Z.A. Pelczynski, Cambridge, London, New York, New Rochelle, Melbourne, Sydney 1984; Ephraim Nimni, *Marxism and Nationalism*.

マルクス、エンゲルスにおける Nation の Nationalität

*Theoretical Origins of a Political Crisis*, London 1991; Peter Fryer, *Engels, A Man of His Time*, in: *The Condition of Britain. Essays on Frederick Engels*, (ed.) John Lea and Geoff Pilling, London 1996. 良知力『向う岸からの世界史』未来社一九七八年。

- (2) Engels, *Der magyarische Kampf*, in: Karl Marx, Friedrich Engels, *Werke*, hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin 1956ff. [以下 MEW.] Bd.6.S.165ff.; Ders., *Der demokratische Panlawismus*, MEW, Bd.6, S.270ff.; Ders., *Revolution and Counter-Revolution in Germany*, in: Karl Marx, Friedrich Engels, *Gesamtausgabe*, hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der KPdSU und vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin 1975ff. [以下 MEGA<sup>2</sup>].1-11.
- (3) Michel Löwy, *Marxism and the National Question*, in: *New Left Review*, vol. 96, 1976.
- (4) Engels, *Deutschland und Panlawismus*, MEW, Bd.11, S.194.
- (5) 『エンゲルス・イタチロキ』のなかの第一章「フョーハン・エンゲルス」に關しては『*Deutsche Zeitschrift für Philosophie*, 14. Jg. 1966, H.10. [以下 DZfPh.]』の頁を、それ以外の場合は MEW, Bd.3, の頁を記す。
- (6) 国民に關するマルクスの初期の言明、例えば「世界の精神的身体としての国民」(MEW, Bd.1, S.39)が、そこあたり考察から除外する。この時期の国民とは理性的国家 der vernünftige Staat と同義であると。『エンゲルス新聞』時代

- のマルクスの国家観に関しては、Jacob Barton, *Hegel und die marxistische Staatslehre*, Bonn 1963, S.110ff. を参照。
- (7) Marx, Engels, Die deutsche Ideologie, *DZfPh*, S.1203.
- (8) 市民社会の枠組みとしての国民概念は、タム・ハムス『諸国民の富』における国民と異なるものではなからず。シモン・レーンによると、スミスの国民概念は「独立した共同体社会、国民、国家、人民すべて」にあってはなからず。E.J.Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780. Program, Myth, Reality*, Cambridge, New York, Port Chester, Melbourne, Sydney 1990, S.24. なる引用。
- (9) Marx, Engels, Die deutsche Ideologie, *DZfPh*, S.1214/1215, S.1226.
- (10) *Ebd.*, S.1248.
- (11) 国家における普遍性として理解された国民が、「ライン新聞」時代の国民と明らかに異なる。「ライン新聞」時代のマルクスはヘーゲル主義に立脚しており、理性的国家においては国家の普遍的利害と市民社会の特殊の利害の対立は揚棄されたものと見なされている。しかし、「ドイツ・イデオロギー」における国民概念は、むしろ政治的國家と市民社会の分離という近代の二元論を前提している。
- (12) Engels, Der Schweizer Bürgerkrieg, *MEW*, Bd.4, S.396; Ders., Der Anfang des Endes in Österreich, *MEW*, Bd.4, S.508.
- (13) Marx, Engels, Die deutsche Ideologie, *MEW*, Bd.3, S.411/412.
- (14) Marx, Engels, Manifest der kommunistischen Partei, *MEW*, Bd.4, S.467. カリヤマルクスが念頭に置かれているのは、ケインズ関税同盟とフリーゼリゴ・リスティオらによる。Vgl. Karl Marx, *Manifest der kommunistischen Partei*. Herausgegeben, eingeleitet und kommentiert von Theo Stammen in Zusammenarbeit mit Ludwig Reichart, München 1978, S.170; Harold J. Laski, *Communist Manifesto. Socialist Landmark*, London 1948, S.53.
- (15) Marx, Engels, Die deutsche Ideologie, *DZfPh*, S.1228.
- (16) *Ebd.*, S.1235.
- (17) *Ebd.*, S.1248.
- (18) *Ebd.*, S.1236.
- (19) ヘーゲル左派の歴史哲学はケインズの「国民的関心事」に於てなされる。 *Ebd.*, S.1222.
- (20) Marx, Engels, Manifest der kommunistischen Partei, *MEW*, Bd.4, S.466.
- (21) Marx, Engels, Die deutsche Ideologie, *DZfPh*, S.1218/1219.
- (22) Marx, The British Rule in India, *MEGA*<sup>2</sup>, I-12, S.166ff; Ders., The Future Results of British Rule in India, *MEGA*<sup>2</sup>, I-12, S.248ff.
- (23) Marx, Engels, Die deutsche Ideologie, *DZfPh*, S.1236.
- (24) *Ebd.*, S.1248.
- (25) Marx, Über Friedrich Lists Buch "Das nationale System der politischen Ökonomie", in: Friedrich List, *Das nationale System der politischen Ökonomie*, hrsg. von Günter Fabiunke, Berlin 1982, S.462.

- (26) 『ドイツ・イデオロギー』では次のように指摘されている。「この国民においても民族性 Nationalität の固執はブルジョアとその著作家のもとで見られるべきである。」  
MEW, Bd.3, S.458.
- (27) マルクスがナショナリズム Nationalismus という術語を使わなかったのは、この言葉が当時は一般的ではなかったからであろう。ナショナリズムという術語はヘルダーによって先駆的に用いられたが、その後は使われなくなり、再び現れるのは十九世紀末から二十世紀初頭である。Vgl. Reinhart Koselleck, Fritz Gschnitzer, Karl Ferdinand, Bernd Schönemann, Volk, Nation, Nationalismus, Masse, in: *Geschichtliche Grundbegriffe. Historische Lexikon zur politisch-sozialen Sprache in Deutschland*, hrsg. von Otto Brunner, Werner Conze, Reinhart Koselleck, Bd.7, Stuttgart 1992. S.318/319.
- (28) Marx, Engels, Die deutsche Ideologie, *DZFPn*, S.1236.
- (29) Engels, Das Fest der Nationen in London, *MEW*, Bd.2, S.614.
- (30) Marx, Engels, Manifest der kommunistischen Partei, *MEW*, Bd.4, S.479. 『共産党宣言』のこの一節に関するロストフスキーの論文は、「リスト草稿」が発見される前に発表されたにもかかわらず、「民族性」がブルジョア階級の対外的利害共同体であるべきを示唆している。Vgl. Roman Rosdolsky, Worker and Fatherland. A Note on a Passage in the Communist Manifesto, in: *Science and Society*, 1965, S.330ff.

マルクス、エンゲルスにおける Nation と Nationalität

- (31) Marx, Engels, Die deutsche Ideologie, *DZFPn*, S.1215.
- (32) Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung, *MEW*, Bd.1, S.388.
- (33) Marx, Historisch-politische Notizen. Kreuznacher Hefte 4, *MEGA*<sup>2</sup>, IV-2, S.181.
- (34) Marx, Kritik des Hegelschen Staatsrechts, *MEW*, Bd.1, S.232.
- (35) これは同時期にエンゲルスもフランス革命に否定的な評価を下していることは注目される。エンゲルスはフランス革命の始まりを民主主義を「自己矛盾」と捉えて、「政治的自由は自由のせきつきの産物」と捉えている。Engels, Progress of Social Reform on the Continent, *MEGA*<sup>2</sup>, 1-3, S.496. 若くマルクスもフランス革命に関するこの文獻を参照。Auguste Cornu, Karl Marx' Stellung zur französischen Revolution und zu Robespierre (1843-1845), in: *Maximilien Robespierre 1758-1794*, hrsg. von Walter Markov, Berlin 1958; Hans-Peter Jaek, *Die französische bürgerliche Revolution von 1789 im Frländerwerk von Karl Marx (1843-1846)*. *Geschichtsmethodologische Studien*, Berlin 1979; Ders., Der junge Marx und die französische Revolution von 1789. Historiographie und Geschichtsdenken als Quelle der historisch-materialistischen Gesellschaftstheorie, in: *Bürgerliche Revolution und Sozialtheorie. Studien zur Vorgeschichte des historischen Materialismus (1)*, hrsg. von Wolfgang Förster, Berlin 1982; Francois Furet, *Marx and the French Revolution*, Chicago, London 1988; Michel Löwy, 'The Poetry

- of the Past': Marx and the French Revolution, in: *New Left Review*, vol.177, 1989.
- (36) Marx, Kritik des Hegelschen Staatsrechts, *MEW*, Bd.1, S.284.
- (37) Marx, Kritische Randglossen, *MEW*, Bd.1, S.409.
- (38) Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte, *MEW*, Bd.40, S.521.
- (39) アヴィネリは「ヘーゲル法哲学批判序説」における普遍的階級というプロレタリアートの規定と『共産党宣言』における国民的階級を同義としているが、この説明は説得力を持たない。プロレタリアートが普遍的階級であるのは社会革命によって近代の二元論を解消するからであるが、国民的階級としてのプロレタリアートは政治的に解放されつつある状態である。Vgl. Shlomo Avineri, *The Hegelian Origins of Marx's Political Thought*, in: *The Review of Metaphysics*, 1967; Ders., *The Social and Political Thought of Karl Marx*, Cambridge 1969, S.61/62.
- (40) Marx, Engels, Manifest der kommunistischen Partei, *MEW*, Bd.4, S.473. 上の一節に関して、スネデイクト・アンダーソンは、世界階級としてのブルジョアジーがなぜ国民的なのかという問題を提起したが、ブルジョアジーとプロレタリアートが国民的であるのは、階級闘争がさしあたり政治闘争という形式をとるからである。Vgl. Benedict Anderson, *Imagined Communities. Reflections on the Origin and Spread of Nationalism. Revised Edition*, London, New York 1991, S.4.
- (41) Engels, Der Status quo in Deutschland, *MEW*, Bd.4, S.51.
- (42) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4, S.352.
- (43) ヴァイトリンクによると、すでに一八四六年にマルクスは「共産主義の実現はさしあたり問題になりえない。まずブルジョアジーが権力にたかなくてはならない。」と述べている。二段階革命論の成立時期の確定は本稿の課題ではないが、良知力は、一八四五年頃からマルクスの革命論は普遍的構想から特殊の構想へと移行し、ヴァイトリンクとの論争を経て、一八四七年には二段階革命論はエンゲルスとの共通認識となったとしている。Vgl. Brief von Wilhelm Weitling an Moses Hess, 31.März 1846, in: *Der Bund der Kommunisten. Dokumente und Materialien*, hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED und vom Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der KPdSU, Bd.1, S.307. 良知力『マルクスと批判者群像』平凡社一九七一年。
- (44) Engels, Der Status quo in Deutschland, *MEW*, Bd.4, S.51.
- (45) [Anonym.] Programme der radikal-demokratischen Partei und der Linken zu Frankfurt, *MEW*, Bd.5, S.42.
- (46) 当時チェコ・ブルジョアジーはドイツ関税同盟への参加を拒否し、東方に市場を求めていた。これはチェコ・ナショナリズムの経済的基礎である。また、イギリスとドイツの関係と同じ関係がドイツとチェコの間に現れていると

Милан Ота́л, Čeští Liberálové v Roce 1848, in :  
*Sborník historický*, 37, Praha 1990.

S.354/355.

(14) Engels, Der magyarische Kampf, *MEW*, Bd.6, S.165.

(14) Engels, Der Prager Aufstand, *MEW*, Bd.5, S.82.

(15) John Stuart Mill, Considerations on Representative Government, in : *Collected Works 19. Essays on Politics and Society*, Toronto, Buffalo 1977, S.549.

(15) Engels, Demokratischer Charakter des Aufstandes, *MEW*, Bd.5, S.108 ; [Anonym.] Die auswärtige deutsche

Politik und die letzten Ereignisse zu Prag, *MEW*, Bd.5, S.202.

(16) E.J.Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780. Program, Myth, Reality*, S.30/31.

(16) *MEW*, Bd.2, S.233, S.432, S.510, S.547, *MEW*, Bd.4, S.351.

(17) Friedrich List, Das nationale System der politischen Ökonomie, in : Friedrich List, *Schriften / Reden / Briefe*, im Auftrag der Friedrich List-Gesellschaft e.V. mit Unterstützung der deutschen Akademie und der Notgemeinschaft der deutschen Wissenschaft hrsg. von Erwin v. Beckerath, Karl Goesser, Friedrich Lenz, William Notz, Edgar Salin, Arthur Sommer, Bd.6, Berlin 1930, S.210/211.

(17) Roman Rosdolsky, Friedrich Engels und das Problem der "geschichtslosen" Völker, *a.a.O.* S.99.

(18) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(18) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(19) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4, S.341.

(19) Marx, Der Gesetzentwurf über die Aufhebung der Feudallasten, *MEW*, Bd.5, S.282/283.

(20) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(20) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(21) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(21) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(22) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(22) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(23) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(23) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(24) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(24) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(25) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(25) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(26) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(26) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(27) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(27) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(28) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(28) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(29) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(29) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(30) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(30) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(31) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(31) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(32) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(32) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(33) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(33) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(34) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(34) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(35) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(35) Marx, Die moralisierende Kritik und die kritisierende Moral, *MEW*, Bd.4.

(36) Франкфуртский журнал "Рейформе" über die französischen Zustände, *MEW*, Bd.5, S.448ff.

(36) Engels, Polendebatte in Frankfurt, *MEW*, Bd.5, S.183ff. や参照。

(37) Engels, Polendebatte in Frankfurt, *MEW*, Bd.5, S.183ff. や参照。



- ト批判」住谷一彦、田村信一、小林純編『ドイツ国民経済の史的研究』御茶の水書房一九八五年。
- (28) List, Das nationale System der politischen Ökonomie, a.a.O. S.47.
- (29) Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung, MEW, Bd.1, S.382.
- (30) List, Das nationale System der politischen Ökonomie, a.a.O. S.8.
- (31) Ebd., S.161.
- (32) Ebd., S.51.
- (37) Ebd., S.196.
- (38) 『ライン新聞』編集部の脚注「保護関税について」(MEW, Bd.40, S.398)をマルクスが執筆した可能性は否定されないが、確認されていない。(MEGA<sup>2</sup>, I-1, S.1141)しかしマルクスは『ライン新聞』紙上で展開された自由貿易と保護貿易に関する論争を知っていたと思われる。保護貿易論を主張していたフッケンが編集長を辞任した後、『ライン新聞』では自由貿易論が優勢になり、オットー・カンプハウゼンやハインリヒ・ブリュッケマンがリスト批判を展開していった。この点に関しては以下の文献を参照。
- Wilhelm Klutentretter, *Die Rheinische Zeitung von 1842/1843 in der politischen und geistigen Bewegung des Vorwärts*, Dortmund 1966, S.85/86; Harald Müller, Voraussetzungen und Inhalte der außenpolitischen Reflexionen in der Rheinischen Zeitung 1842/1843, in: *Jahrbuch für Geschichte*, 28, Berlin 1983, S.54.
- (39) Günter Fabiunke, Nachwort des Herausgebers, in: Friedrich List, *Das nationale System der politischen Ökonomie*, Berlin 1982.
- (40) Engels an Marx, 19. November 1844, MEW, Bd.27, S.11; Engels an Marx, 17. März 1845, MEW, Bd.27, S.26; Engels an Julius Campe, 14. Oktober 1845, MEW, Bd.27, S.439; Karl Marx, *Historisch-ökonomische Studien*. Pariser Hefte, MEGA<sup>2</sup>, IV-2, S.503ff. ヘンゲルスは一八四六年に『ドイツ社会主義批評』の計画を放棄した。Vgl. Engels an Marx, 18. Oktober 1846, MEW, Bd. 27, S.58.
- (41) 「リスト草稿」の成立時期については異説がある。Sozialistische Studiengruppen, *Die deutsche Ideologie. Kommentar*, Hamburg 1981. だが、『エンツェンベロギー』の終わり頃かそれ以降、しかして『哲学の貧困』の前とされている。(Ebd. S.13, S.137) マルクスは Christine Ikker, Zur Entstehungsgeschichte des List-Manuscripts von Karl Marx, in: *Marx Engels Jahrbuch*, 11, Berlin 1989. に於ける推定に従う。
- (42) Engels, Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie, MEW, Bd.1, S.504.
- (43) Ebd., S.501.
- (44) Marx, Über Friedrich Lists Buch "Das nationale System der politischen Ökonomie", a.a.O., S.453.
- (45) リストがフエリエの存在に気づいたことは確かだが、リストに対するフエリエの影響は証明されていない。W.O.Henderson, Friedrich List and the French Protection-

ists, in: *Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft*, Bd. 138, Heft 2, Juni 1982. リストとフェリエの関係についてマルクスはラウから示唆を得たと推定される。Vgl. Christine Ikker, *Zur Entstehungsgeschichte des List-Manuskripts von Karl Marx*, a.a.O.

(76) Marx, Über Friedrich Lists Buch "Das nationale System der politischen Ökonomie", a.a.O., S.454.

(77) Marx, Rede über die Frage des Freihandels, *MEW*, Bd.4, S.457/458.

(78) Engels, Schutzzoll oder Freihandels-System, *MEW*, Bd.4, S.60.

(79) マルクスは一八四七年のブリュッセルにおける経済学者会議で、ドイツの保護貿易論者リッティングハウゼンを批判しながら、次のように述べている。「なんと惨めな論拠であろう、なんと乏しい知識であろう。……なぜこの人はむしろ手っ取り早くリストの演説を繰り返し返さなかったのだろうか。リストの演説には少なくとも鋭さと生命力と勇氣がある。」*Aus dem literarischen Nachlaß von Karl Marx und Friedrich Engels*, hrsg. von Franz Mehring, Berlin, Stuttgart 1923, Bd.2, S.378. リストに対するこのような肯定的評価は二段階革命論から理解されるべきであろう。

(80) Engels, Die Polendebatte in Frankfurt, *MEW*, Bd.5, S.334.

(81) Engels, Der dänisch-preussische Waffenstillstand, *MEW*, Bd.5, S.395.

(82) Engels, Revolution and Counter-Revolution in Ger-

マルクス、エンゲルスにおける Nation と Nationalität

many, *MEGA*<sup>2</sup>, I-11, S.45.

(83) List, Das nationale System der politischen Ökonomie, a.a.O., S.210/211.

(84) マルクス、エンゲルスの「歴史なき民」とリストの「植民論」の類似性はすでにクンターソンによって指摘されている。Vgl. W.O.Henderson, *Friedrich List. Economist and Visionary*, 1789-1846, London 1983, S.107.

(85) Friedrich List, Die Ackerverfassung, die Zwergwirtschaft und die Auswanderung, in: *Ders. Schriften / Reden / Briefe*, Bd.5, S.499.

(86) 喜安朗「一八四八年とヨーロッパ」『岩波講座世界歴史十九、近代六、近代世界の展開』岩波書店、一九七一年、所収。

(87) この結論はヴァリツキによっても支持されている。Vgl. Andrzej Walicki, *Marxism and the Leap to the Kingdom of Freedom. The Rise and Fall of the Communist Utopia*, Stanford, California 1995, S.159.